

プリズンホテル

冬

浅田次郎

プリズンホテル

冬

浅田次郎



徳間書店

プリズンホテル

冬

一九九五年九月三〇日 第一刷
一九九九年四月一〇日 第九刷

著 者 浅田次郎

発行者 徳間康快

発行者 株式会社徳間書店

〒一〇五-八〇五五 東京都港区東新橋一-一-一六
電話 東京 (〇三) 三五七三-一〇一一 代表
振替 〇〇一四〇〇-四四三九二

印刷所 図書印刷(株)

カバー印刷所 真生印刷(株)

製本所 大口製本印刷(株)

定価は帯・カバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は小社またはお買い求めの書店にてお取り替えます。

© Jiro Asada 1995 Printed in Japan

編集担当 芝田 暁

ISBN4-19-860349-9

プリズンホテル

冬

造本・装幀
矢島高光

「あんたア……もうどこにも行かないどくれよ
……もうどこにも……」

——薄幸な女は夜汽車の窓にもたれて言った。

ほくは月のうち一週間か十日を、神田駿河台にある「山の上ホテル」で過ごす。

そう、昔から文化人の宿として有名な、そして現実にいつ行っても小説家の二人や三人はカンヅメになっている、あのクラシックホテルである。

べつに伊達や酔狂ではない。通世^{とんせい}して小説を書くにはまことに適した場所だからそうするのである。

東京のどまんなかにあるのに極めて閑静で、大学の図書館や古本屋街が近いから、とっさの資料調べにも事欠かない。小ちんまりとしたサイズは落ち着くし、何よりもホテル側に、締切に追われてカンヅメになっている作家に対する十分な配慮がある。いわば牢屋番としての配慮である。「文化人の宿」という伝統的なコンセプトがそれほど徹底しているというわけだ。たとえば近ごろ気付いたことなのだが、ここの従業員たちは客がカンヅメになって書いている原

稿がいったいどの出版社の依頼によるものかということまで知っているらしい。

業界の情報を把握しているのか、一読者としての推測であるかは知らない。だがともかく、
ぼく自身が予約し、ひそかにチェックインし、自発的にカンヅメとなっていて、なぜか原稿
の依頼主を知っているらしいのである。

この点はまさに神の配慮と言えよう。

古いホテルの窓に風の鳴く夜のことだった。

ぼくはそつなく用意された作家専用の大机に向かって、へ哀愁のカルボナーラのクライマ
ックスに挑んでいた。

それはへ仁義の黄昏シリーズの大ヒットにより極道作家の烙印を捺されてしまったぼくが、
アイデンティティーの回復を賭けて世に問う、ぶっちぎりの恋愛小説である。

なにしろヨーロッパに留学中の女性ヴァイオリニストが、かつての恋人である新聞社特派員
と、ベネチアのサン・マルコ広場で偶然出会い、たちまち焼けばっくに火がついて地獄の恋
に堕ちてしまうというのだ。

原稿の半ばまでは、すでに大日本雄弁社の編集者に渡してある。半ばといったって五百枚も
あるから、先方が気に入ろうと気に入るまいと、もはや取り返しはつかない。

もちろんヤクザの出演はなく、銃声も聴こえず、お得意の法的医学的用語を駆使した露骨な
セックス・シーンもない。古今の恋愛小説の定義に従い、物語はさしたる盛り上がりもなく、
ただ哀しく美しく、ガラガラと進む。

数日後、件の編集者がすつ飛んできて、「そろそろマフィアが出てきますよね、そうですよ

ね」と言ったので、すかさずバックドロップを決めてやった。

クライマックス・シーンは、ヴァイオリニストと新聞記者がたそがれのゴンドラに乗り、夕日に染まった「溜息の橋」の下で熱いくちづけをかわすのである。

——古いホテルの窓に風を聴きながら、ぼくはうっとりとして、恋人たちをいざなう船頭になっていた。

電話が鳴った。

ぼくは呪いの雄叫びを上げて原稿をまき散らし、壁に十回も頭突きをくれてから受話器をとった。

フロントマンは怒鳴り返す気にもなれぬほどの文化的な声で言った。

「——大日本雄弁社の萩原様がご面会です」

ぼくは静かなバリトンで答えた。

「はい。今おりて行きます。ロビーで待たせて下さい」

浴衣とスリッパでロビーに降りて行けないのは、山の上ホテルの唯一の欠点である。

着替えをしながらかつ考えた。オギワラという名の編集者は知らない。おおかた新入社員に差し入れの弁当でも持たせて寄こしたのだろう。

神の配慮により、ホテルの従業員はぼくが大日本雄弁社の原稿を書いていることを知っている。すなわち、牢屋番の配慮により、ホテルが取り次ぐ訪問者は、同社の編集者とぼくの家族だけだ。いちおう家族と呼ぶが、そのうちわけは青山のマンションに同居する義母兼家政婦の富江と、柏木のボロア・パートに飼っている恋人兼サンドバッグの「パープーお清」こと田村清子である。富江は毎朝十時きっかりにパンツの替えを持ってやってくる。ついでにそつと睡眠

薬と精神安定剤の数を調べて帰る。清子は夜の十時きっかりにやってきて二、三発はり倒され、ついでに凌辱されて帰る。

エレベーター前の大時計は午後九時三十分をさしていた。じきに清子がやってくるだろうから、雄弁社とは面倒な話はせず、弁当だけひたたくて追い返すとしよう。

ロビーでは獄中の小説家が何人か、思いつめた顔でコーヒーを飲んでいた。

革張りの古い応接セツトに、齢のころなら二十八、九歳とおぼしき女性編集者が、痩せた背を伸ばして座っていた。どうしてそれが編集者だとわかるかというと、つやのないパサパサの髪をうなじでひつつめており、化粧ツ気のない硬質の顔に、牛乳ビンの底を並べたようなメガネをかけているからである。

女はほくに気付くと、ちよつとおろおろした感じで立ち上がり、最敬礼をした。ホテルの従業員たちは神のごとくフロントの中で微笑み、あるいは牢屋番のごとく玄関の両脇に立っていた。

「お忙しいところ、申しわけありません」

と、女はもういちど深々と頭を下げた。はて、新人ではなさそうだし、弁当も見当たらない。どうしたことであろう。

遠目にはひどい醜女に見えたが、存外美人である。いったい何の因果でパーマ屋にもブティックにもメガネ屋にも行かないのだろうとぼくは思った。

「して、ご用件は？」

ぼくは脂じみた縁なしメガネをハンカチで拭いながら訊ねた。

「木戸孝之介先生ですね」

女は勧められるままに古い革椅子に掛けると、低い、切迫した声で言った。今さら何を言うのだろう。男だったらたちまち躍りかかって首を絞めるところだが、そうもいくまい。早いとこ追い返して、明日は一日じゅう編集長あてに無言電話をかけ続けてやるとしよう。

「いかに、木戸ですが」

メガネをかけ直すと、視野が明るく開けた。女は思いつめた表情でぼくを睨みつけている。

こいつは雄弁社の社員ではない、と気付いたとき、総身がざわりと鳥肌立った。女はまちなく、雄弁社の編集人を騙って忍びこんだ何者かだった。

古い窓の外に風は蕭々と鳴っていた。

ぼんぼりのようなランプ・シェードに、白い、硬質の顔を晒して、女はじつとぼくを見つめている。ぶ厚いメガネが光を反射して表情は掴めないが、それは明らかに標的を追いつめた刺客の顔だった。

「だ、だれだね、君は。名乗りたまえ」

女はぼくを睨みすえたまま、ハンドバッグの口金を開けた。

極道小説のリアリティを維持するために、実在の親分を何人も登場させてしまっているのだから、いつかは危ない目に遭うこともあろうと覚悟していた。しかし出版社を脅すでもなく、マンションのガラスを割るでもなく、いきなり女の刺客に襲われようとは思ってもいなかった。

それにしても、クラシックホテルのロビーで、美しい刺客にベレッタの銃弾を見舞われて死ぬとは、何とドラマチックな結末だろう。業績はともかく、死にざまだけはヘミングウェイばりだ。へ仁義の黄昏シリーズは爆発的に売れ、既刊八冊の版元である丹青出版はきつと烏森のオンボロビルを畳んで、新橋駅前に立派な新社屋を建てることだろう。せめて一年以上もほ

つばらかしてある九巻目を、完結させておけばよかったとぼくは心から悔んだ。

ところが、女がハンドバッグから取り出したものは、ベレッタではなかった。青ざめ慄えながら、女は一枚の名刺をぼくに差し出したのである。

「申しわけありません。こうするしか方法がなかったんです。仕方なかったんです」

名刺には、〈株式会社丹青出版文芸部 荻原みどり〉とあった。

ぼくは安堵も憤りも忘れて、ただ絶句した。

「許して下さい。〈仁義の黄昏〉の原稿を、どうしても今月中にいただいてこいつて言われて、でも、先生はつかまらないし、上からは毎日やいのやいの言われるし、私、どうしようもなくって、それでつい……」

「……それでつい、雄弁社の名を騙ったというわけですか」

ぼくは切実に詫びる女の細い首を、一気に絞めてしまう衝動に良く耐えながら、なるたけ文化人のようにそう言った。

「とんでもないことです。いけないことです。でも、でも仕方がなかったんです、他に方法が見つからなかったんです」

荻原みどりはテーブルの上に額を打ちつけ、拳を慄わせて泣き出した。

たいへん意外なことだが、ぼくは女の涙には弱い。富江にしろ清子にしろ、じつと苦痛を耐え忍ぶタイプの女だからこそ、殴れるのである。人目もあることだし、ぼくはただおろおろとして、荻原みどりを宥めるしかなかった。

毎年春と秋に二冊の勢いでつつ走ってきた〈仁義の黄昏〉シリーズは、九巻目の中途で頓挫している。ヘパート9・吹雪の誓いは、長い懲役をおえた若頭が網走刑務所を釈放され、地

吹雪の中に立って復讐を誓う、という場面で終わっていた。これではまさか完結とは言えないし、読者も黙っているはずはなかった。

頓挫した理由は簡単である。長い懲役をおえた若頭が復讐を誓う場面は、これで三度目だったからだ。一度目は長トス片手に殴りこみ、二度目はダンプで突っこんだ。そのたびに本懐をとげず懲役に行き、三度目の出所でまたまた復讐を誓ったのだから、この続きはチャンドラーだって無理だろう。

身から出た錆^{さび}ではある。

「わかった、わかった。他社の名を騙るとはたしかに不屈き至極だが、君の情熱はよくわかった。ぼくは決して君を責めない。怒りもしない」

すると突然、荻原みどりは泣き止み、からりと顔を上げた。

「では、へ仁義の黄昏・パート9、月末までにお願いします。わあ、良かった。私、ずっとつききりでお世話します。お隣の部屋とりますから、お茶でもお食事でも、その他なんでも言いつけて下さい。もしお邪魔でなければ同じお部屋でもかまいません。マッサージでも耳そうじでも、その他なんでも言いつけて下さい」

ぼくは絶句したまま青ざめた。荻原みどりは革椅子のうしろに隠してあったばかりかいスーツケースを、ころころと引きずり出したのだった。

「そういうことで、よろしくお願いします」

牛乳ピンのメガネの底に光る目は火の玉のように燃えさかっており、^{こころざし}志たつせずんば生きてまた帰らじという決意が体じゅうに漲^{みなぎ}っており、きりりと引締まった口元は、強い意志力を感じさせた。

ぼくは圧倒された。

もしそのとき、大時計の打つ十時の時報とともに、清子があたふたと駆けこんでこなかったら、ぼくはたぶん萩原みどりの強靱な意志力のなすがままになっていたことだろう。

進退きわまったばくにとつて、清子は天から降ってきた救いの天使だった。

ぼくが清子に課した一方的な条約によれば、遅刻一分以内ビンタ一発、五分以内は顔面回し蹴り、十分以上は水責めのうえ座禅ころがしの刑と決まっている。だから清子は中央線の車両の中でも走り、御茶ノ水の駅からも走り続け、ホテルに向かう細い坂道を、一生けんめいに駆け上ってくる。

心臓病で寝たきりの母親の介護をし、別れた極道亭主との間にできた一人娘を寝かしつけてから出てくるので、時間はいつもぎりぎりになるのだ。

ぼくは古いホテルの窓から、冬枯れたキャンパスぞいの坂道を風に吹かれた朽葉のように、一日散に駆け上ってくるその姿を見るのが好きだった。

そういうときの清子の一途な姿は、ことさらに美しい。たぶん、殴られるのがいやだから走るのだろう。だがぼくは、恋人の待つ部屋に向かって走る清子の姿が見たい。一秒でも早くぼくの胸に抱かれたくて走ってくる、清子の姿が見たいのだ。

三十分も前からカーテンを開けて待ちこがれ、けんめいに坂道を駆け上ってくる清子の姿を見ると、ぼくは、完全に永久にぼくのものになるはずのないその女を、どこの誰よりも愛していると思う。

清子は百人の男とすれちがって、百人の男を振り返らせるほどの美人である。しかし、頭がちと足りない。ものすげえアナログである。天は二物を与えずというが、清子は美貌という一

物の代価として、人間の幸福にまつわるすべてのものを支払ってしまったらしい。

このときも息せききつて玄関に駆けこみ、ロビーの奥にはつきりとぼくを視認したにもかかわらず、エレベーターに乗ってしまった。で、しばらくして階段をパタパタと下りてきて、ぼくに駆け寄り、「ごめんさい、先生。遅刻しちゃった」と、息をつく。

ぼくが清子をアナログだというのは、つまりこういうことである。

はげしく肩で息をしながら時計をうらめしげに見、「ああ、一分過ぎちゃった……」と、絶望的に呟く。

この際、そんなことはどうでも良かった。ぼくは立ち上がって清子の肩を抱き寄せると、ちよつと唇の端を歪めて、クラーク・ゲープルのような思いっきりやさしい笑顔を萩原みどりに向けた。

「すまんが君、一時間ほどここで待っていてくれるかね」

みどりは一瞬、眉根に皺しわを寄せて猜疑心さいぎしんを露わにした。

「ハッハッ、心配は無用だ。ぼくは女をダシにしてここを逃げ出すような卑怯者ではないよ。

一時間後に善人に生れ変わったなら、君を迎えにくる」

「はあ……」

と、萩原みどりはわかったようなわからないような返事をし、ビビアン・リーそのけの清子の美貌に目をみはった。

「ごゆっくり、どうぞ……」

みどりは心もちうなだれて言った。そのひつつめ髪のうなじがほのかな羞恥のいろに染まるのを確認すると、ぼくは清子をからめとるようにして駆け出した。

「あれ、どうしちゃったんですか、先生。なにもそんなにあわてなくたって」

あわただしくエレベーターに飛び乗り、正面のカウンターに向かって受話器を握るしぐさを見せた。トラブルだ、あとで電話を入れる、というほどのジェスチャーを、フロントマンは一瞬にして理解した。おそらくことのなりゆきを遠目に窺^{うかが}っていたのだろう。かしこまりました、お任せ下さい、という意をこめて、フロントマンは肯いた。

「くそ。なんてこった。あれはタダモノじゃないぞ。きっと丹青出版の秘密兵器だ。原稿取り専門の特攻隊だ。ついに奥の手を出しやがった」

ぼくはエレベーターの壁を殴りつけた。よよと泣き崩れたあと、ぼくの動揺を見計らってかなりともたげられた冷酷な女の表情が、頭にこびりついていて。すべては周到に計画された作戦にちがいがなかった。

「ちきしょう、俺の弱味まで知っていやがる。性格をみんな見越してるんだ。その手にのってたまるか」

「先生の性格を見越してるって？」

「そんなことはお前が一番良く知っているだろう」

知るわけはない。清子は三階の静まり返った廊下を歩き、ドアに真鍮の古めかしいキーをぼくがさしこむまでの間、足らぬ頭をふりしぼって考え続けているふうだった。

「わかった。強い人には弱くって、弱い人には強いのか」

「ばか。そんなのは上ツツラだけのことだ」

ぼくはドアを蹴破るようにして部屋に飛びこんだ。

「じゃあ、ええと——そうだ。悲しいときはゲラゲラ笑って、つらいときはど平気な顔をして、

それから——」

「それから、何だ？」

「それから、好きな人ほどこいじめるの」

ぼくはただちに清子の首根っこを掴み、額をガンガンと壁に打ちつけた。

「ご名答だよ、お清。よかったな、おまえはこんなに愛されているんだ」

ゴキリと鈍い音がして、清子は床に崩れ落ちた。

そんなことをしている場合ではなかった。今は一刻も早く、あの恐怖の秘密兵器の射程から遁^{のが}れねばならない。

「急げ。まだ最終列車には間に合う」

「最終列車って、どこへ行くんですか？」

「どこでもいい。ともかく、あいつの手の届かないところまで逃げるんだ。なにボサツとしてる、仕度をしろ」

清子は鼻血をたらしながら起き上がり、部屋中にとりちらかった原稿や資料を片付け始めた。

「あの……私も、ですか」

「あたりまえだ。俺はひとりじゃコーヒーも淹^いれられないし、パンツも替えられない」

「でも、私、手ぶらです。着替えも持ってないし」

「パンツなら俺のをはけ。余分にある」

「……………」

必殺の延髄斬りを後頭部に受けて、清子は再びベッドの上に昏倒した。

「あいたつ……ごめんなさい、先生。でも、おばあちゃん具合わるいし、保育園の送り迎えと

「かもあるし……」

「そんなものは富江にやらせりやいい。どうせ俺がいなくなりや、あいつの仕事の九割方はなくなるようなもんだ。寝たきり老人の世話とかガキの面倒ぐらい、喜んでやるさ」

ぼくはポストンバッグを抱えると、とまどう清子を引きずるようにして廊下に出た。原稿用紙と資料とがぎっしり詰まったバッグは、清子と同じほどの重さだった。

エレベーターを待つ間、地の底にめりこむような両手の重みに耐えながら、ぼくは考えた。

刺客の魔手から遁れることを理由に、ぼくはたぶん、永久に完全にぼくのものにはならないこの女を、誰の手も届かない遠い場所に連れ去ろうとしているのだろう。たぶん清子と二人きりで冬の夜汽車に乗る理由を、ずっと探し続けていたのだろう。

「遠く、って……まさか……」

エレベーターに乗ると、清子は悲しい顔をぼくに向けた。

髪を切って、きれいになった。どうして勝手にそんなことをするんだと、髪を切った次の日に殴りつけたが、本当は美しい顔の輪郭をいっそう際立たせるその髪形を、ぼくは気に入っていた。

短い旅の間に、褒めてやろう。

「決まっているだろう。原稿取りが絶対にたどりつけない場所といったら、あそこしかあるまい」

「——プリズンホテル」

「そういう言い方はよせ。奥湯元あじさいホテルだ」

ドアが開くと、フロントマンはカウンターの上でわずかに掌を挙げ、待て、という合図をし